

「金子 剛 展」ギャラリートーク

平成 27 年 4 月 12 日（日）

エイブル 2 階 交流プラザ

皆さん、おはようございます。

今日は紹介を自分でさせてくれと、事務局にお願いをしました。すると、僕は思いもしなかったのですが、オヤジが喋るのに、何も無しに喋るのは大変だろうと、教え子たちが、僕には宝物のような教え子たちが沢山いるのですけれど、その最たる平江君というのがパワーポイントの資料を作ってくれまして、「これを見ながら喋ると良いですよ」と言ってくれたので、それを使わせてもらいます。



左の絵は大学を出る時の自画像です。下は、油絵で一番最初に県展で賞をもらった「家族」という絵です。うちの親父が酔っぱらって寝ている、それを妹やお袋達が見ているという構図を考えて描いたものですが、初めて県展で賞をもらった絵です。ここからスタートしました。

鹿島高校から同じ年に、佐藤君と真木君と僕の3人、佐賀大学の美術の方に入りましたが、入ってすぐ僕はこういう絵をどんどん描いていきました。写實的に絵を描くというのが一番わかりやすいのですが、この頃から、僕はピカソとか青木繁とかゴッホとか沢山の絵描きに惚れて、気が多いし色々な絵描きさんの良いところを取り入れながら自分の絵を確立していったのです。



また、僕は石本秀雄先生から「お前、何でも勉強しろ」と言われて、彫刻、染色、デザイン、油絵、日本画、全部勉強して、県展に4部門出して全部入選したんですよ。大学4年生の時でしたけれど。才能があったのでしょねえ（笑）。



僕は、鹿島で結婚して誕生院というお寺にお世話になっていたのですが、そこの古い建物を借りて、K教室という絵画教室を開いていました（左写真）。そこに、後に人間国宝になる鈴田滋人さんとか、鹿島美術人協会の現会長をしている杉光定君とかが、土曜日ごとに夜な夜なここに来て絵を勉強していました。杉光君なんかは何時までも帰らないで熱心に描いていたので、実は僕たち夫婦の気持ちは複雑でした。新婚でしたからね（笑）。そういう時代でした。



左の写真は、昭和44年に鹿島美術人協会をつくった時のものです。会長が納富進先生（写真右）で、K教室で描いていた滋人君のお父さんの鈴木照次先生（写真中央）が副会長、「事務局はお前しろ」ということで、僕が事務局をしました（写真左）。あと、この画面には見えませんが、光武岱三先生や岩永京吉先生もおられたと思います。そういう鹿島美術人協会を作った年です。

昭和47年に僕は、夢にまで見たフランスに初めて行きました。37年に行く予定だったのですが、金が無くて給料を10年間貯めて、そして行ってきました。そしたら絵が物凄く変わったのです。やっぱり「目から鱗」みたいなのがよくあると思うくらい、もうどんどん絵が変わっていくのですね、僕の絵が。やっぱり、だから皆さんヨーロッパに行かれるのですね。

僕はずっと「家族」をシリーズに描かせて貰っています。孫が生まれたり、孫が成長したり、娘が子供を産んで抱いているところとか、そういうのは家のアトリエの中で描く分ですから、モデルさんなんかも雇う金なんか無いしですね。こういう孫たちの絵や、それから庭に咲く花なども、油絵で沢山描いてきました。後ではこれが役にたって、貞松先生とシリーズを出すことになるのですけれども。

残念ながら三年前に亡くなりましたが、鹿島市高津原出身で僕の4級先輩の貞松光男先生という植物学者がいらっしゃいます。その先生が、小城の果樹試験場の場長をされていたので、僕が小城高校にいる時に初めて美術室においでになって、「あんた、俺の後輩やろ？」と、「今度俺がミカンの柑橘類を研究した雑誌が出るから、表紙を描いてくれんね？」と言われてからの知り合いです。とても博識のある先生で可愛がられました。

その先生と一緒に、8年間で700枚くらい、佐賀県の植物を描き回り、佐賀新聞に連載されました。毎週1枚ですから大変でした。7年間、あつという間に1週間が来るのですね。

先生がこれを描けという植物を、「これは先生何ね？」と尋ねると、「これは食べられるよ。美味しいよ」と。また、「これは薬になるよ、なんになるよ」と教えて貰いながら描いた絵が、植物シリーズです。本を2冊、二人で佐賀新聞社から出して貰いました。

昭和61年に、僕は佐賀北高校に転勤して来て、芸術コースというのを作らせてもらいました。その芸術コースで教えた子たちが、色々な育ち方をして、今は世界中に散っています。

中でも、池田学君は今、アメリカのウィスコンシン州で絵を描いているのですが、世界的なとんでもない男になりました。畳4~5枚分くらいあるような大きな作品を2年ほどかかって、小さい付けペンで描いていくわけです。これが完成したら佐賀で第1号展があって、日本中を何カ所か回って、最終的には外国に展示になるらしいですね。スタートが佐賀ですので、是非みなさんに見て頂きたいと、楽しみにしています。

もう一人、宮崎健介という、アフリカに行ってアフリカ貧民街にある学校で絵を描いたりなんかしています。学君の後輩ですけど、学君とは物凄く対照的な、大きな全くもうギラギラな絵を描く男です。大きな作品、東京に行くと高速道路のコンクリートの大きな柱がありますが、ああいう所に1ヵ月

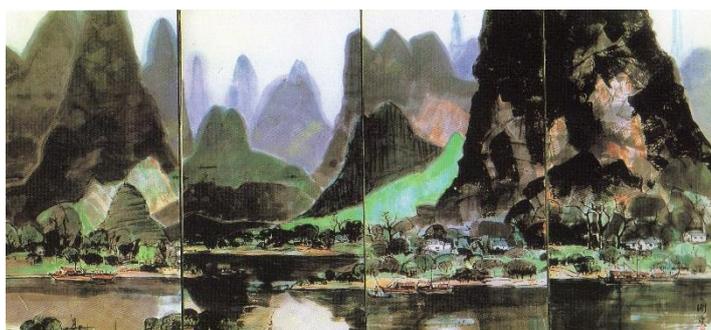


半かかって絵を描くのですよ。何も頼まれた訳じゃない。描かせてもらう許可をもらって描く、そういう男です。非常に面白い男たちが育ってきました。

それから、僕は版画もやるのですよ。ここに1点持ってきていますが、こういう版画を後期にたくさん展示しようと、今、制作をしております。ぜひ飾りますので見てやってください。右の作品は、木版画です。120号ですから大きいです。古希展の時に平江君から、「渾身の1点を作らないといけないですよ。10年間の作品をただ並べただけではダメ。新しい渾身の作品を作ってください」と言われたのです。120号ですから畳1枚半くらいあるのですが、これは板を彫ったのですよ。それを三つに分けて彫りました。そして、もう1点彫りました。その時、初めて平江君から「よく頑張りましたねえ」と少し褒められたかな。杉光君も「これは、よく頑張ったね」と褒めてくれました。教え子に褒められるのが一番嬉しいですよ。先生に褒められるのは、あまりなかったですからね（笑）。



右は、桂林に行って描いた墨絵です。500号の大きな墨絵を、4枚のパネルにして繋いだのですが、それでも桂林の素晴らしい壮大さは表現できない。漓江下りを4~5時間かけて楽しむのですけれど、こういう風景を次々に見ながら、美味しい料理を食べながら、ずっとスケッチしたものを、作品に描きました。



左の絵は小城の観光協会から頼まれて、小城の清水さんや須賀神社を描いたものです。蛍の名所だから蛍も描いてくれと言われたので、下の方を暗くして描き入れました。小城高校に勤めたので、そういうポスターを10枚ほど描きました。そしてこのポスターが、全国のポスターコンクールで、1位は北海道でしたが、これが2位になりました。全国から物凄い数が集まった中から選ばれたのは、やっぱり墨絵で描いていたからでしょう、そういうふうなことを言われました。



ここで、少し自分が絵を描いてきた話をさせて貰いたいと思います。

僕が小学校5年生の時にスケッチ会があって、その時に納富進先生が僕を一等賞にしてくださいました。そして僕のお袋に「お宅の息子は絵が上手ですね」と言ってもらったのがきっかけで、ひょっとすると、僕も本当に上手なのかもしれないと思ったのでしょうね。それ以来、絵を描くのが楽しくて、とうとう中学でも高校でも美術部に入って、勉強は出来ないし、スポーツも大したことないし、だから美術に行ったんじゃないかと思えます。ですから、本当に小さい時に偉い先生から一言言われたのが嬉しくて仕方なかったのですね。

そこに葉書をいっぱい飾っています（右写真）。これは僕が旅先から、旅に出ると必ず1点、写真機は持たないで、小さな絵ハガキ大のスケッチブックを持って行って、絵を描いて、母ちゃんにラブレターを出すのです。それが百何十枚たまってきました。ここに恥ずかしながら、「裏は見えないように中に入れてあるから、よかろう？」って、母ちゃんに許可を貰って飾っています。

今思うと、やっぱり僕は絵を描けたから楽しく生きてきたかなと思うのですよ。だから、定君とよく韓国旅行をしますが、定君が3枚くらい描いているうちに、僕は6枚くらい描いているかもわかりません。下手ですけど早く描く、何かそういうのが楽しいのですね。そして、そういうふうに友達と絵を描くのが楽しくてやってきました。

先ほどからご覧いただいたように、モチーフと言えば、僕は家族しか描いていない。ただ残念ながら、孫たちも言うのですが、「誰を描いているの？」と。顔を全然描いていないですから。顔はほとんど描きません。色面で描きますから、誰を描いているのかわからないと言われるような絵しか描きません。

僕は写実というのは描けないわけではないし、植物なんかは写実的に描かないと、何かわからなくなるので描く自信はあるのだけれど、描きたくないのですね。それで、何を描きたいかという、家族の中にある温かさとか、情愛とか、温もりとかそういうものが出れば良いなあって思って、一生懸命3ヵ月、4ヵ月かかって絵を描いているのですよ。

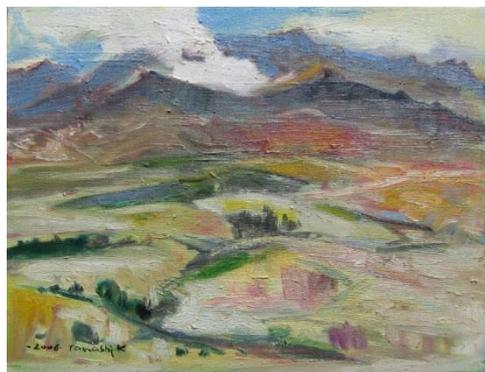


床の間コーナーに松の絵を1点飾っていますが（左絵）、2年前に定君と韓国のテグという、すごく良いところに行ったのですよ。山の中に、古い200年以上経ったお寺があるのです。その周りに松林があって、そこに行った時に、ものすごく空気感の良さを感じました。凜とした何とも言えない空気感、それを描きたかった。虹の松原の松も描きましたが、ちょっと違うものを感じたのです。そしてそれを表現したくて、空間感というのか、松を見るのではなくて、松の間にある空気感の様なものを表現しているんだと思って見て貰うと嬉しいです。

それから孫の吹いているリコーダーの絵（右）は、孫が一生懸命に顔を描いて貰おうと、構えてモデルになったのですが、顔は全然描かないで、「何を爺いじ、描いているの」と言うから、「分るかどうか分らんけれどね、絵の中に音楽が聴こえるような、あなたのリコーダーの笛の音が聴こえるような絵にしたいのよ」と言ったら、あんまりよく分からないで、むっとして、腹をたてました。特に、顔の周りに寒色を、大体僕は暖色が好きですが、この絵に寒色でもって、少し音を表現できるように努力したつもりです。音をちょっとでも感じて貰うと、僕は嬉しいです。



下の絵は、阿蘇の噴煙を描いたものですが、阿蘇を描いても天山を描いても、何かそこにある空気感、そして冷たい雪景色のその清々しさ、そういうものを描きたいのです。だから、かなり要らないものは消しました。看板とかあったら、消します。看板を描いていたらおかしいですからね。でも、写真の様に描く人たちは、それなりにちゃんと描いていますけれど。僕は僕のスタンスで描きたいと思っています。



そういう形で僕は絵を描いてきました。学校に勤めていたものですから、学校で墨絵を教えないといけない、染色も教えないといけない、彫刻も教えないといけない、版画も、油絵も、水彩も。そこで、私が佐賀北高校に転勤してすぐ考えたのは、大規模校で一学年13クラスある、それが3クラス減になる、そうすれば3×3の9クラスが空く。これを何に使うかと、職員会議の始めから手を挙げて、芸術コースを作りたいと言ったらブーイングでした。それでも、その北高で芸術コースがやっと出来るようになるわけですが、そこでも先生が足りない。一人で、彫刻も、版画も、油絵も、デッサンもって、一人で三役も四役もしなくちゃいけない。そういうこともあって、僕は色々なことを、自分も楽しみながら教えてきました。そして、今では、自分も版画を作りたい、墨絵を描きたいというふうになってきたような気がしています。もともと気が多い、あんまりぼつとしない、定まらない男でしたから、そういうのが身につってしまったのだらうと思っていますけれど。

これからも自分なりの絵を描かせて貰いながら、鹿島の地で、また展覧会が出来ることを、すごく楽しみにしています。

最後に、僕の大事な宝物である教え子を代表して、次の3名に話をしてもらいます。

【杉光定さん】

先生は色々な人と付き合われます。もう私も65歳になりますが、自分と比べると、先生は化け物だなあと感じますね。今でも先生は本当に忙しいのですよ。そして人を大事にされますね。今も日韓交流という事で、高校生、中学生を引率したり審査をしに、韓国にも一緒に行ったりしているのですけれど、とにかく一緒にいると楽しいし、私が3枚描くとき先生は6枚描く、このスピード感の違いとかです。ね、「何しよっか」って怒鳴られるのですが、この歳になっても、学ぶことが多いのです。そして、鹿島を愛する先生ですね。ずっと事務局をされて、佐賀に行かれてからも、欠かさず鹿島の美術人協会

展には出品されますし、我々がちょっと不十分な事をやっている、「何しよっか」と怒られます。本当に私にとっては大きな、そして鹿島にとっても大きな存在だと思います。ですから、もう少し頑張ってくださいと思っています。

【鈴木滋人さん】

金子先生から私は何を学んだのか？ もちろん、絵を学んだのですが、先生の「情熱」ですね。絵に対する姿勢が一貫して変わらないのです。私もずいぶん疲れたな、きついなと思うときがあるのですが、先生はそういう事を全然感じさせない。もちろん大変だと思います、身体を壊したりもされていますし。でも、こちらで何かあった時は、わざわざ飛んできて、正に本気で付き合われるのですね。だから逆に怖いのです。ある意味、一番本当の事を言うてくださる先生でもあるのです。絵は正直、作品は正直でありまして、ちょっとでも手を抜くとすぐ分るのですね。それをすかさず、最近は柔らかく言っただけなのですが、非常にそこら辺は緊張感をもって先生に作品を見て頂くという事があります。そういう意味で、鹿島で育っているいろいろ発表する場が沢山出来たのですけれども、その起点となる先生の生き方を学ばせていただいたと思います。

【平江潔さん】

42年前に金子先生と出会い、ずるずるとこの世界に引きずり込まれて、今も金子先生のいろいろな展覧会のプロデュースとか、お世話をさせて貰っています。頼まれたことはハイかイエスで全部やります。そして、頼まれないことまでやる。金子先生は、頼まれもしないことをしゃしゃり出てされるのですよ。これが感動を与えるのですね。そういうところを、いわゆる教員魂で受け継いでしまったのかなあと、時々反省をしますが、後悔はしていません。先生から教わったことは、もちろん絵の云々もあるのですけれど、「ものづくりをする事によって、人づくりになるのだ」という事が僕の頭の中にしみじみとあります。そういうものに繋がっていきたいなと思って、いろいろ企画を今もしております。



△ギャラリートーク風景



△床の間コーナー 前期展示風景



△交流プラザ 前期展示風景